末黒野

すぐろの

7月号（通巻839号）

末黒野　平成二十八年七月五日発行　第七十一巻第七号（通巻八三九号）

花筏

小川玉泉
（名誉主宰）

菜の花に身をすつぽりと隠るる児

瓶に活け紅ほのかなる白椿

三段に枝を賑はせ鉢の藤

満ち潮や川遡る花筏

吊り橋へ枝をさしのべ山ざくら

一斉に風む捉えて舞ふさくら

満ち潮や川遡る花筏

江の島の西の海岸、西浜へと注ぐ片瀬川の右岸の堤には老桜があり、川面へ枝を差し延べ．ている。車の通らない堤は散歩に好都合である。折から散り始めた桜が、筏を形作っている。良く見ると花筏は下流を目指すのではなく、上流へとゆっくり移動している。上げ潮時なんだと合点し、しばらく眺めていた。

濃山吹

松本三千夫

箱根路の湖風届く藤の花

寄れば濃く離れば淡し藤の花

濃山吹少女まぶしく胸育て

石飛ばしても消えぬ憂さ春の湖

日は高し己が影掃く雪柳

重なりて水押し上げて蝌蚪の国

春禽の声のみ零る一風樹

窓低き寺の東司や竹の秋

啄木忌働かざる手ポケットに

春灯の暗さに慣れて地下のバー

洩るる灯のみな朧なる家路かな

春宵や人差指で打つピアノ

引鴨

黒滝志麻子
（副主宰）

雛あられ食むや岬の風五色
借景に城おく園や雲雀東風
風船が風船を追ふ波止場かな
囀の風となりたる源氏山
水あれば水辺に寄りて野に遊ぶ
引鴨や末広がりのあかね空
口笛の上手くなる子や山笑ふ
時もたぬ波くりかへす朧かな
夕桜ほぐれゆくもの身に添ひて
狂ひなき石垣に降る桜かな
春月の昇るや水の匂ひして
波重き津軽海峡鳥帰る

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

耕耘機

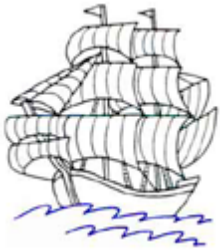
安斎久英

産土の乳垂れ銀杏の余寒かな
菜の花や昼を掲ぐる十日月
指先を追へる稚の目温かし
鶯や背山妹山相和して
花の山吹かるるままに散るままに
耕耘機巧みに老いの意気地かな
突堤に釣人の背な暖かし
仙石原の末黒の芒目の限り
田楽のたれを甘めに連翹忌
行く春や波の奪へる虚貝

翁草

石黒興平

春くや山茱萸色を重くせり
春寒や路上ライブに歩をとどめ
雪形の馬の痩せたり高嶺晴
花三分すでに空き無き屋台席
古地図に見る港の歴史花曇
浜風に乗るや親子のしやぼん玉
リラ冷えや煉瓦舗道の青海波
屈み見る杖の媼や翁草
ひとしきり句座の和めり桜餅
春日傘かたむけ巨船見上げをり



花

田中臥石

目白来て磯馴木に羽休めをり
海釣や背に降る崖の雪柳
天と地を繋ぐ凧糸海へ伸ぶ
食卓に酢の匂ひけり分葱饅
薬湯に顎浮かせをり山桜
一献の返杯花の莫蓙に坐す
半円の春の虹立つ九十九灘
目眩く花の光や寛永寺
苗箱へ種播く娘早生晩稲
望郷や蛙乗せたるたなごころ

春の風邪

松田泰子

一郷の何も彼も知る川温む
太陽の黒点となる揚雲雀
藪椿咲くも落つるも人知れず
ゆるがせにできぬ約あり木瓜の花
春耕の鍬置かれゐて風すさぶ
犬ふぐり澄む日ふるさと近うする
囀に遠ざかりつつ橋渡る
裏山のみどり素直に夏近し
女にも口ひげのあり春の風邪
朧夜や配水管のひとりごと

花辛夷

森清堯

踏青や憂さひとつづつ鎮めつつ
囀りや末よりひかりこぼしをり
谷戸奥の要となりぬ花辛夷
池の面に色をつなげり紅枝垂
絵タイルの港通りや春ショール
タグボート寄り添ふ巨船鳥雲に
花曇り声を伴ふ生欠伸
さなきだにうるむ老いの眼朧月
巣づくりの雀の忙し赤芽垣
葉牡丹の揃ふ茎立ち駅広場

黄蝶

森清信子

芽起こしの音なき雨や山家の灯
春光やすぐ向き変ふる稚魚の群
軍港の空の銀鼠花木五倍子
ポケットにミントの小箱桜東風
囀や目の眩むほど光る湖
海光に溶けては出づる黄蝶かな
草庵へ渡る小流れ座禅草
春宵やさくら色なる食前酒
夕さりの風吹き変はる落花かな
日を乗せてきらと玻璃めく蝌蚪の紐

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

神田川　岡田史女

男佇つ大桟橋や夕霞
太く長く亭午の汽笛初桜
接岸の白き巨船や鳥雲に
山よりの水引き寄せて花筏
田へいそぐ水の膨らむげんげ草
一陣の風の飛花呑む神田川
花散るや水かぎろひの只中に

鰆東風　岡野里子

海光の洗ふ礁の石蓴かな
松原のひかり遍し鰆東風
沖霞廻ると見えぬ大風車
梅が香や絵馬の触れ合ふ音幽か
亡き父母に会ひに行く径匂鳥
豪華船港の春を輝かせ
潮位標打てる飛沫や鰆東風

青炎集

松本三千夫選

横浜　神谷さうび

野仏の胸の高さへ草若葉
花あけび下がれる先の谷深し
鑿あとの著き隧道冴返る
稲荷社の朱の鮮やかや春時雨
傘たたむ時に花びら零れけり
伸ばし初む浦島草の糸揺るる

横浜　東小薗美千代

春深し猫のつそりと朝帰り
穏やかに暮るる里曲や春深き
雅びやか鎌倉山の花の雲
奥宮のなぞへにゆかし花菫
岨道のたらの芽欲しや棘怖き
若松の勢芳し保安林

横浜　松浦哲夫

父吹きて子の追ひかけるしやぼん玉
淡きとも濃きとも見えて春の闇
耕人の顔となりゐて鍬を打つ
花吹雪花神のあやす乳母車
花の塵すき込む鍬の軽きかな
四季の国とりわけ華の弥生かな

横浜　小沼ゑみ子

終活と云ふ字目につくシクラメン
漱石の居さうな書斎花の昼
どさと来る通販雑誌花の朝
焼酎を下げ来る爺や花の野毛
長き髪束ぬる巫女や木の芽風
野暮用の区役所前や辛夷咲く

横浜　及川照子

竹林の風の響きや春寒し
春風を切つて踏みゆくペダルかな
盛塩の狭き三和土や春灯
波の穂を掠むるかもめ春の海
たそがれの谷中銀座や猫の恋
長閑けしやくるりと曲る象の鼻

大網白里　湯本朱美

さまざまの彩を纏ひて花の山
喫茶店友と語らふ春夕
幼木に一朶の花のありにけり
桜見て人見て歩む上野山
飛花落花雀も人と交はりて
花のアーチ行き交ふ人や乾門

新宿　浅岡麻實

土蔵の翳の湿りや歯朶萌ゆる
菜の花の蝶と化す里白き雲
整骨院の骸骨笑ふ四月馬鹿
靖国神社の件の桜蘂降りぬ
密室の聴力検査亀鳴けり
葉隠れに残る一輪梅若忌

横浜　小野弘正

久遠寺や読経にゆるる山桜
点滴の二色の玉や春柳
湧水にさざ波たつや花吹雪
耳慣れぬ言葉行き交ふ花見かな
三椏やケーブルカーか五千歩か
迷彩の落下傘のせ春の風

横浜　小田嶋野笛

袴着て卒業の子のねびまさる
さへづりへ耳預けたる生返事
うららかや仕舞ひ忘れの猫の舌
枕辺に考の時計や大朝寝
トランプを吐き出すピエロ万愚節
風船へ老楽の息満たしやる

横浜　卯月十六

免れし再開発や灌仏会
湧く如く初蝶バスの後より
トラックも速度落して花の橋
遠出の禁犯し三浦に潮干狩
菜種梅雨ネオン明りの関帝廟
菜の花や貨客混載単車輌

耕土集

黒滝志麻子選

山茱萸の盛りや夢をみる思ひ　　和泉　道草
初摘みや蓬野に刻わすれをり
禁猟区赤い風船あがりけり
迎臥せる雲のすがたや麗らなる
囀のこもごも木の間町の空

誰かれと話の弾み植木市　　横浜　田中　春江
山盛の学食ランチ暖かし
虎杖の色の盛りや無人駅
みどり児の這ひ這ひ早し花筵
鶴亀算得意の妻や春日傘

彼岸会や幼大きな夢語る
女坂登り尽きたり初桜
百歳の主の定席春の昼
養花天縁なし眼鏡の曇りけり
日もすがら眺め七日の桜散る

春時雨慌ててたたむ綿菓子屋　　佐藤　喬風
藤棚の支へに活きる老樹かな
水温む蘆花に因みの逗子の浜
晩春や脳裡に浮かぶ原節子
袴剥ぐ手間も楽しやつくしんぼ

古雛や太き柱に振子鳴る　　五十嵐富士子
神宮の銀杏並木や木の芽吹く
剪定の済みたる並木空の青
早蕨の葉の解るるや雑木林
木もれ日の煌めく小径竹の秋

沈丁花日の暮れてより香のつよし　　宮﨑他異雅
手摺なき橋ためらふや山笑ふ
引き際のかくありたしや落椿
一本の桜の中の保育園
新幹線桜並木を下に見る

新潟　太田チヱ子